・ローマ・フィオレンティーニ地区におけるジュリア通りの建設と発展

CONSTRUCTION AND DEVELOPMENT OF "VIA GIULIA"
LOCATED IN THE FLORENTINE'S RESIDENTIAL DISTRICT, ROME佐々木 学*
Manabu SASAKI

The purpose for the study was to clarify the distinct features in the construction as well as development of Via Giulia located in the Florentine's residential district, Rome. The following was evident from the 16th century census records as well as present street conditions: (1) Restaurant owners, tailors and bakers were amongst the wide variety of occupations which took up business in the Florentine residential district during the 16th century. (2) The 1508 urban redevelopment project was undertaken to correct streets intersecting "Via Giulia" diagonally and rearrange the intersections to a vertical angle. (3) The Florentine Antonio da Sangallo il Giovane was responsible for construction of three buildings, thus contributing to the prosperity of "Via Giulia".

Keywords : Italian city, Renaissance, Julius II, Donato Bramante, Antonio da Sangallo il Giovane

イタリア都市, ルネサンス, ユリウス2世, ドナート・ブラマンテ, アントーニオ・ダ・サンガッロ・イル・ジョーヴァネ

1. はじめに

1448年、ローマ在住のフィレンツェ商人によってピエタ信心会が結成された後、テヴェレ川左岸のサンタンジェロ橋付近は、フィレンツェ出身の人々が多く居住するフィオレンティーニ地区として発展した。本稿で研究対象としたのは、法王ユリウス2世（在位1503-13）と建築家ドナート・ブラマンテによってフィオレンティーニ地区南部を横断するように開通されたジュリア通りである。19世紀末から20世紀前半にかけてのヴィットーリオ・エマヌエーレ2世通りの開通工事、テヴェレ川の護岸工事およびプリンチペ・アメデーオ橋の建設工事にともない、フィオレンティーニ地区の建築の多くが破壊されたが、ジュリア通り北部地域にはサン・ジョヴァンニ・デイ・フィオレンティーニ教会をはじめ、スキエラ型フィオレンティーニ住居、ジュリア通り82番地住居、サンガッロ・メディチ・クラレツリ宮、サッケッティ宮といった16世紀にフィレンツェ出身者の住居として使用されていた建築が現在でも残っている。

ルイージ・サレルノ、ルイージ・スペツツァフェッロとマンフレード・タフーリの著作では、ユリウス2世によってテヴェレ川沿いに計画されたジュリア通りおよびそれとともに計画されたジュリオ橋、トリブナリ宮、トリブナリ広場、パンキ通りとルンガーラ通りの計画意図が明らかにされ、トリブナリ宮とジュリオ橋の建設が重要であったことが論じられている¹。しか

し、1508年にユリウス2世とブラマンテによって整備されたトリブナリ宮とジュリオ橋を結ぶ経路であるジュリア通り北部地域の敷地割りの様態に関する検証は不十分であった。一方、ジュリア通り北部地域に計画または建設された建築についても先行研究が存在するが、いずれも建築単体の設計意匠、空間特質、経年変化などの分析にとどまっている²。ジュリア通り北部地域は、フィオレンティーニ地区の発展を背景として街路空間が形成される過程を物的に提示している興味深い事例であるにもかかわらず、街路発展の原動力となったフィレンツェ出身の人々の地域社会に関する検証が不十分であったため、街路空間の形成過程が不明瞭であった。そこで本稿では、以下の3つの目的からジュリア通り北部地域の形成過程について考察を試みた。

- (1) 16世紀に作成された国勢調査記録の統計分析を通して、ローマにおけるフィレンツェ出身の人々の地域社会の特質を理解すること。
- (2) 街路形態と建物境界線の解析から、ユリウス2世とブラマンテによって整備されたジュリア通り北部地域の敷地割りの特質を明らかにすること。
- (3) 以上によって得られた知見に基づき、フィレンツェ出身の人々の地域社会の発達を背景として、ジュリア通り北部地域の街路空間が進化する過程を明瞭化すること。

* 法政大学大学院工学研究科 大学院生・修士(工学)

Graduate Student, Graduate School of Engineering, Hosei Univ., M. Eng.

2. フィレンツェ出身の人々の地域社会について

2-1. ピエタ信心会の結成とフィオレンティーニ地区の形成

フィオレンティーニ地区とは、フィレンツェ出身の人々が多く居住していたサン・ジョヴァンニ・デイ・フィオレンティーニ教会周辺の地域を示す語句で、イタリアの文献には Quartiere dei fiorentini または Quartiere della Nazione fiorentina と記載されている。トスカーナ州出身の人々が多く住んでいたことから Quartiere toscano と呼ばれることもあるが、本研究で分析対象とした16世紀の国勢調査記録で確かめることができた居住者の出身地はフィレンツェだったので(2-2を参照)、本稿では「フィオレンティーニ地区」と記すこととした。以下では、先行研究に基づき、フィレンツェ出身の人々によるピエタ信心会の結成とフィオレンティーニ地区発達の概略を述べる。

フィレンツェ出身の人々が法王庁で働くためにローマに住み始めたのは中世であり、テヴェレ川左岸湾曲部に広がるポンテ地区に彼らが集まり住み始めたのは、1308年から1377年にかけての法王のアヴィニョン幽囚と1378年から1417年にかけての教会分裂の後、法王マルティヌス5世(在位1417-31)による法王庁の復興が始まった15世紀前半であった³。法王庁の再建によってもたらされるポンテ地区の発展の可能性に魅せられたローマ在住の商人や職人がこの地区に進出し始め、その時、特に多かったのが14世紀までにサンテスターキオ地区に住み着いていたフィレンツェ出身の人々であった⁴。

15世紀、フィレンツェ出身の人々の地域社会は、ボルゴ地区サン・ピエトロ広場周辺とポンテ地区バンキ通り周辺に存在していた⁵。当時、ポンテ地区に住んでいたフィレンツェ出身の人々は、銀行や商館を開業し、テヴェレ川沿いに水車を設置するための広大な土地を所有し、彼らの守護聖人洗礼者ヨハネの祝祭の日には儀式を挙げて祝っていた⁶。

1448年、ローマでペストが流行した際、ポンテ地区に住んでいたフィレンツェ商人が中心となり、病を宣告された人を救済するために、ピエタ信心会(ミゼリコルディア会)が結成された⁷。そして、ピエタ信心会はペストが治まった後も、ローマに住むフィレンツェ出身の人々のための信心会として活動を続けることとなった。

結成当時、ピエタ信心会はサンタ・ルーチア・アッド・フルーメン教会⁸を入手し活動していたが、数年後にこの教会は放棄され、サン・サルヴァトーレ・ディ・ラウロ教会の回廊に面した2部屋を取得して活動の場とした。その後、1488年にサン・パテレーオ・アッフィーネ教会を入手し、信心会の本拠地(礼拝堂)として利用し始め、1519年に、この敷地にサン・ジョヴァンニ・デイ・フィオレンティーニ教会が建設され、現在に至るまでピエタ信心会の本拠地となっている。

15世紀の法王の下でトスカーナ州出身の建築家、石工、大工、左官、舗装工などのマエストロがローマで働き、多くの作品を残したことはシルヴィア・ダネージ・スクアルツィアーナの著作で詳細に論じられている⁹。また、国立公文書館に保管されているニコラウス5世の治世の法王庁の文書に mercantesca と書かれたフィレンツェ商人への報酬が多く記載されていることは、15世紀中頃、すでに彼らがローマ経済の中心的役割を果たしていたことを裏付けている¹⁰。

ている¹⁰。

その他、ポンテ地区バンキ通り付近には、フィレンツェ出身の商人達が商館を開業していたこと、フィレンツェのメディチ家とパッツィ家、シエーナのキージ家といったトスカーナ州出身の銀行家が事務所を設けたこと、この街路付近にあったゼッカ(造幣局)の経営をフィレンツェ出身の金細工師ヤコポ・デル・マニョリーノが独占するようになっていたこともわかっている¹¹。

2-2. ローマに住んでいたフィレンツェ出身の人々

ピエタ信心会の本拠地の移転状況を地図上に示すと、図1のようになる。これにより、15世紀にローマに住んでいたフィレンツェ出身の人々の活動範囲は、ポンテ地区の広範囲にわたっていたことが推測できる。しかし、ポンテ地区におけるフィレンツェ出身の人々の居住様態を明らかにするためには、ピエタ信心会の本拠地存在だけでは不十分である。また、先述のとおりフィレンツェ出身の商人、銀行家、金細工師がポンテ地区で活躍していたことは先行研究により明らかになっているが、フィレンツェ出身の人々の地域社会の様態を更に詳細に理解するためには、他にどのような職業の人々が住んでいたのかを把握する必要があると考えた。そこで本稿では、16世紀に作成された国勢調査記録の分析から、ローマにおけるフィレンツェ出身の人々の分布と彼らの職業について検証することとした。

15世紀のローマ市民の職業や出身地について詳細に記述された公的文書は見つかっていないが、16世紀前半に法王レオ10世(在位1513-21)と法王クレメンス7世(在位1523-34)のもとでおこなわれた国勢調査記録が残っている。レオ10世によって作成された国勢調査記録¹²には、教区ごとに建物所有者の名前、職業、出生地が書かれているが、紛失した箇所があまりに多いため、ポンテ地区におけるフィレンツェ出身の人々の居住様態を把握することを困難にしている。一方、クレメンス7世の国勢調査記録¹³は、ローマ14地区における建物所有者の名前、職業または出身地(両方記載されている場合もある)および建物の住民数が記載され、紛失した記録もない。そこで以下では、クレメンス7世によって1526年から1527年にかけて実施された国勢調査の記録を分析し、ローマにおけるフィレンツェ出身の人々の分布およ

図1. ピエタ信心会の本拠地の移転

び彼らの職業の明瞭化を試みた。

イタロ・インソレーラは、クレメンス7世の国勢調査記録に記載されたフィレンツェ出身者の住民数を集計し、ローマ14地区の中でポンテ地区が最もフィレンツェ出身の住民が多い地区であったことを著作で紹介している¹⁴。しかし、国勢調査記録によると当時、ポンテ地区はローマの中で最も住民数の多い地区であったため、フィレンツェ出身の住民数の合計が最高値を示したことだけでは、フィレンツェ出身の人々が同郷者の地域社会があったポンテ地区に特に集中して住んでいたことの検証としては不十分であったといえる。そこで本稿では、さらに詳細にローマにおけるフィレンツェ出身の人々の居住様態を把握するためにクレメンス7世の国勢調査記録を再統計分析することとした。

まず、出身地として fiorentino、fiorentina、di Fiorentino、fiorentinus、fiorentinus、fiorentino、fiorentina というフィレンツェ出身を示す単語が併記されている建物所有者の数と、これらフィレンツェ出身者が所有する建築の住民数を地区ごとに集計した。その後、各地区の建物所有者および住民数の合計に対するフィレンツェ出身者の割合をそれぞれ算出した(表1)。

本稿で算出した住民数の合計に対するフィレンツェ出身者の割合と、建物所有者の合計に対するフィレンツェ出身の建物所有者の割

地区名	建物所有者数(A)	住民数(B)
01 モンティ地区	4/373(1.1%)	11/1757(0.6%)
02 コロンナ地区	9/541(1.7%)	34/3324(1.0%)
03 カンボ・マルツィオ地区	28/939(3.0%)	118/4574(2.6%)
04 ポンテ地区	91/1485(6.1%)	288/8069(3.6%)
05 バリオーネ地区	17/913(1.9%)	83/6319(1.3%)
06 レーゴラ地区	33/1180(2.8%)	105/5614(1.9%)
07 サンテスターキオ地区	12/432(2.8%)	46/3121(1.5%)
08 ビーニャ地区	11/377(2.9%)	46/2863(1.6%)
09 カンピテッリ地区	3/254(1.2%)	12/1907(0.6%)
10 サンタンジェロ地区	11/605(1.8%)	39/3366(1.2%)
11 リーバ地区	2/325(0.6%)	9/1355(0.7%)
12 トラステーヴェレ地区	13/824(1.6%)	60/4927(1.2%)
13 ボルゴ地区	26/536(4.9%)	84/4926(1.7%)
合計	263/9285(2.8%)	947/55035(0.2%)

A: フィレンツェ出身の建物所有者数 / 建物所有者数の合計 (フィレンツェ出身者の割合%)

B: フィレンツェ出身の住民数 / 住民数の合計 (フィレンツェ出身者の割合%)

表1. ローマにおけるフィレンツェ出身者の分布 (1526-27)

原典表記 (人数)	現代イタリア語訳	日本語訳
hosto (3)	oste	宿(飲食店)の店主
sartone (2)	sarto	仕立屋
revenditore (1)	rivenditore	小売りの商人
calzetaro (1)	calzolaio	靴職人
medico (1)	medico	医師
sensale (1)	sensale	農作物や家畜類の仲買人
bandicalle (1)	bandierai	旗製造業者
fornaro (1)	fornaio	パン屋
lavandara (1)	lavandaia	洗濯屋
merzaro (1)	?	?

注: merzaroと明記されたフィレンツェ出身者が1人確認できたが、どのような職業であったかを解読することはできなかった。

表2. ポンテ地区のフィレンツェ出身者の職業 (1526-27)

合がポンテ地区で最高値を示すことは、ピエタ信心会を中心として形成された同郷者の地域社会があったポンテ地区に、特にフィレンツェ出身の人々が集中して住んでいたことを裏付けている¹⁵。

次に、国勢調査記録に書かれたフィレンツェ出身の人々の職業を解説した。フィレンツェ出身の建物所有者の情報は、名前とフィレンツェ出身である事を示す先述の単語を併記するのみで、職業を記述していない事例が多い。ポンテ地区のフィレンツェ出身の建物所有者の中で、職業が明記されていたのは13人であった。ラテン語や旧イタリア語で書かれた職業名を現代イタリア語と日本語に翻訳したのが表2である。職業名が記載されたフィレンツェ出身者は少なかったものの、この分析結果は、当時のポンテ地区には商人、銀行家、金細工師、マエストロ以外にも、多くの職種を持ったフィレンツェ出身の人々が住んでいたことを示唆している。

3. ユリウス2世とブラマンテによる街路開通計画について

3-1. ジュリア通り開通計画の意図

以下では、タフーリにより考察されたユリウス2世とブラマンテによるジュリア通り開通計画の意図について整理しておきたい。

ジュリア通りの開通は、ジュリオ橋とトリブナリ宮の建設計画、ルンガーラ通りの開通、バンキ通りの拡幅という一連のプロジェットの1つとして位置づけられている(図2)。ユリウス2世による計画では、ルンガーラ通りはさらに南へ延長され、トラステーヴェレ地区南部のリーパ・グランデ港まで達する予定であった。つまり、ユリウス2世の計画は、サン・ピエトロ大聖堂があり信仰の中心であったボルゴ地区、リーパ・グランデ港があり産業の中心として機能していたトラステーヴェレ地区、経済の中心として発達していたバンキ通りおよび司法の中心地として計画されていたトリブナリ宮を結ぶ交通システムとして計画されたのである¹⁶。

トリブナリ宮の建設は、カンピドーリオで行われていた司法機能をジュリア通りに移転するという計画であり、ブラマンテに設計が依頼された。また、トリブナリ宮と旧カンチェッレリア宮に挟まれた土地には広場がつくられる計画もあった。タフーリは、これらの計画について、ユリウス2世は歴代皇帝やコムネ(地方自治体)が利用してきたカンピドーリオではなく、法王による行政の中心地を形成しようと試みたと考察している¹⁷。そのため、トリブナリ宮とサン・ピエトロ大聖堂を直接結ぶ経路に位置していたジュリア通り北部地域の敷地割りの整理が重要視された。

ジュリア通りの建設がはじまるとされる1508年に、トリブナリ宮とジュリオ橋の間に位置していたピエタ信心会の礼拝堂、小住居1つおよび付属の2つの菜園が破壊される計画が立てられた。ピエタ信心会の礼拝堂の破壊について記した以下のような手記(1508年8月11日)が、サン・ジョヴァンニ・デイ・フィオレンティーニ教会に残っている。

「法王は私達の信心会と礼拝堂を解体するためにブラマンテ

図2. テーヴェレ川沿いの計画

と数人のマエストロを派遣した。私たちは、信心会の仲間を集め、マエストロ達に工事をやめるように要請した。」¹⁸

その後、礼拝堂および小住居と菜園は取り壊されたが、1508年9月10日、ユリウス2世はピエタ信心会に新しい教会を献じることを表明した¹⁹。

一方、1508年にブラマンテによって建設工事が開始されていたトリブナーリ宮は、1511年に工事が中断され、1513年にユリウス2世が死去すると、トリブナーリ宮の正面に計画されていた広場とジュリオ橋の建設計画も中止され実現しなかった。

3-2. ジュリア通り北部地域における敷地割りの整理

新たな司法の中心地として計画されたトリブナーリ宮とジュリオ橋計画地との間に広がっていたフィオレンティーニ地区は、ユリウス2世にとって重要な再開発地域であった。そのため、ジュリア通り北部地域は、街路開通工事が始まった1508年に、ユリウス2世とブラマンテによって敷地割りが見定されたとしていゑる²⁰。しかし、ジュリア通り開通工事の詳細を記した当時の史料や図面が残っていないため、この敷地割りの整理の特質について今まで詳しく考察されたことがなかった。そこで本稿では、ジュリア通りに結節する街路と15、16世紀に建設された建築の様態の分析から、ユリウス2世とブラマンテによって決定された敷地割りの特質について考察する。

研究対象地域において、ジュリア通りに結節する街路は、近代になって開通したアッチャイオリ通りを除けば、ジュリア通りを横断していない。コンソラート通り、チマトーリ通り、パッレ通り、スガレリ通りはジュリア通りに対して斜めに結節し、ラルゴ・デイ・フィオレンティーニ²¹、オルピテリ通り、チェファエロ通りはジュリア通りとほぼ垂直に結節している(図3)²²。

ジュリア通りに対して斜めに結節する街路は1508年以前の都市様態に左右され決定し、垂直に結節する街路はユリウス2世とブラマンテによる敷地割りの整理によって形成されたと推測できる

が、以下では15、16世紀に建設された建築のファサードの位置と現在の建物境界線の特質に着目しながら、この推論を検証したい。

ジュリア通りに対して斜めに結節している街路のうち、コンソラート通り、チマトーリ通り、スガレリ通りの3つの街路には、15世紀に建設された小住居が残っている。サン・ジョヴァンニ・デイ・フィオレンティーニ教会の正面にある2つの住居建築はどちらも15世紀に建設され、ユリウス2世からフィレンツェ共和国に与えられた建築である。スキエラ型フィオレンティーニ住居は、1504年、ヴェネツィアに占領されていたローマの領土獲得のための戦争の同盟国であったフィレンツェ共和国に与えられた²³。現在はジュリア通りに面して住居の入口があるが、15、16世紀には、コンソラート通り沿いに入口を持つ間口の狭い3つの小住居であったことがピエトロ・トーマイの研究により明らかになっている²⁴。また、ジュリア通り8番地住居は、ジュリア通り開通の際の土地の買収の代償として、ユリウス2世からフィレンツェ共和国に譲られたもので、現在はサン・ジョヴァンニ・デイ・フィオレンティーニ教会に面して入口があるが、もとはチマトーリ通り沿いに住居の入口があった²⁵。スガレリ通りに残っている15世紀に建設された2つの住居のファサードは、現在でもこの街路に面している²⁶。

これらの街路の両側に建造物が建ち並び、街路としての体裁を整えた年代を特定することは難しいが、15世紀に建設された小住居のファサードがジュリア通りに斜めに結節する街路に面していた事実は、これらの街路が1508年以前の都市様態に左右されて形成されたことを意味している。

一方、ピエタ信心会の礼拝堂破壊後に決定されたサン・ジョヴァンニ・デイ・フィオレンティーニ教会の敷地と、トリブナーリ宮の建設計画地は、ジュリア通りに対して垂直な敷地境界線を有している²⁷。トリブナーリ宮の隣に位置しているサッケッティ宮の敷地には、1514年にブラマンテの助手ジュリアーノ・レノによつて工房が建設され²⁸、サン・ジョヴァンニ・デイ・フィオレンティーニ教会の隣の敷地に建つバンディネリ寄宿学校は1617年のフィレンツェ出身のパン職人バルトロメオ・バンディネリの遺贈によって建設され²⁹、ジュリア通りと垂直に結節する2つの街路形態が見定された。

ジュリア通りに斜めに結節するパッレ通りと、垂直に結節するオルピテリ通りには15世紀の建築やユリウス2世の治世に建設された建築は残っていないが、前者は1508年以前の都市様態に、後者はユリウス2世とブラマンテによって決定された敷地割りの様態に影響を受けて形成されたと理解できる。

最後に、サッケッティ宮に隣接する2つの小住居とトリブナーリ宮計画地

(1) スキエラ型フィオレンティーニ住居 (2) ジュリア通り8番地住居 (3) ラッファエロ通り計画地 (4) スガレリ通り住居 (5) サン・ジョヴァンニ・デイ・フィオレンティーニ教会 (6) バンディネリ寄宿学校 (7) サンガッロ・メディチ・クラレリ宮 (8) サッケッティ宮 (9) トリブナーリ宮計画地 (10) サン・ピエーロ・デッラ・パネッテ教会

図3. ジュリア通り北部地域概略図

に残っているサン・ピアージョ・デッラ・パニョッタ教会について考察しておきたい。これらの建物は、ジュリア通りに対して垂直な敷地割りの中にあるが、建物境界線がジュリア通りに対して斜めに接している。これは、ジュリア通りとテーヴェレ川に挟まれた街区にも、ユリウス2世とブラマンテによる敷地割りの整理以前には、ジュリア通りと斜めに交差する都市の軸線上に建物が配置されていたと示唆している。

つまり、ジュリア通り北部地域におけるユリウス2世とブラマンテによる敷地割りの整理は、ジュリア通りとテーヴェレ川に挟まれた街区において、ジュリア通りに斜めに交わっていた1508年以前の都市の軸線を、ジュリア通りに対して垂直に整えるものであったと考えられる。

3-3. ピエタ信心会の礼拝堂の破壊意図に関する考察

ユリウス2世とブラマンテによる礼拝堂の破壊について、タフォーリは、ピエタ信心会を解体することで、ポンテ地区で勢力を強めていたフィレンツェ出身の人々に対して牽制を加える意図があったと考察している³⁰。たしかに先述の手記には、「信心会と礼拝堂の解体」と記してあるが、信心会の人間が礼拝堂の破壊を信心会の解体と解釈して手記を書いた可能性があるため、ユリウス2世の計画が信心会解体を意図したものであったかは定かではない。当時のフィレンツェ出身の人々のローマにおける勢力の拡大は、法王庁に脅威を与えるものだった可能性はあるが、ユリウス2世の治世、フィレンツェ出身の銀行家や商人はローマの経済を活性化させ、マエストロは芸術と都市の復興に貢献していた。そのため、ユリウス2世による礼拝堂破壊の意図を、単にフィレンツェ出身の人々への対抗策であったとするのでは不十分であるといえる。

既に論じたように、1508年にはじめられたユリウス2世とブラマンテによるジュリア通り北部地域における敷地割りの整理は、ジュリア通りに対して斜めに交差していた旧都市軸をジュリア通りに対して垂直に整備するものであった。ジュリア通り開通以前に存在していたピエタ信心会の礼拝堂は、トリブナリ宮とジュリオ橋を結ぶ重要な再開発地域に、旧都市軸上に配置されていたと考えられる。

つまり、主要の目的がフィレンツェ人勢力への牽制ではなく、ジュリオ橋とトリブナリ宮を結ぶジュリア通りの整備であったからこそ、ピエタ信心会による抗議運動のわずか1ヶ月後に、ピエタ信心会に新しい教会を与える決定をくだすことができたのだと筆者は主張したい。

4. ジュリア通り北部地域の発展について

1518年にフィレンツェ出身の法王レオ10世（在位1513-21）によって布告されたサン・ジョヴァンニ・デイ・フィオレンティーニ教会の設計コンペには、ラファエロ・サンツィオ、バルダッサレ・ペルッツィ、ヤコポ・サンソヴィーノ、アントニオ・サンガッロ・イル・ジョヴァネが参加した。コンペではサンソヴィーノ案が高く評価され、建設が開始されるが、彼の設計案はテーヴェレ川沿いの土台崩壊の恐れがあるとして、サンガッロが協力して設計を行うことになり、1527年以降はサンガッロが単独で仕事を続けることとなった³¹。

サン・ジョヴァンニ・デイ・フィオレンティーニ教会の設計コンペに参加した建築家の中で、ウルビーノ出身でフィレンツェのメディチ家で働いていた後、ローマにやってきたラファエロと、フィレンツェ出身のサンガッロは、後に、この教会の近くのジュリア通り北部地域に自邸を計画または建設することになった。

1520年3月24日にラファエロは自邸建設のために、チマトーリ通りとパッレ通りに挟まれた土地を購入し、既に計画案も作成されていたが、同年4月6日に彼が死去すると、計画は中止されることとなった³²。後に、この敷地のために、サンガッロが賃貸用の住居の設計案を作成しているが、実現することはなかった³³。

1516年にサンガッロはジュリア通り沿いの敷地の永小作権を取得し、賃貸用の住居の建設を開始した。その後、1524年から1525年にかけて、隣接していたドナート・ダ・ヴォルテッラの土地を購入し、1535年から1536年にかけてサンガッロとその家族が住む家として建設が開始された³⁴。

また、サンガッロは、1542年に、当時、職人の工房が建っていたトリブナリ宮計画地の隣の土地を購入し、新たな自邸の建設を開始した³⁵。

サンガッロが自邸をジュリア通り北部地域に建設した理由は、1518年に設計コンペに参加して以来、彼が他界するまで仕事をすることになる同郷者のためのサン・ジョヴァンニ・デイ・フィオレンティーニ教会の近隣だというだけではない。建築家にとって高い技術をもつフィオレンティーニ地区の職人の工房が、自邸の近くにあることは好都合であった³⁶。また、本稿で明らかになったように、同郷者の働く飲食店や仕立屋、パン屋、洗濯屋など日常生活に必要な店舗があったフィレンツェ出身の人々の地域社会は、フィレンツェ出身のサンガッロにとって心強かったであろう。そして、ユリウス2世とブラマンテによって整理された敷地は、不規則な街区形態を有するフィオレンティーニ地区の中で、最も建築家の自邸建設に適した土地であったと考えられる。

ユリウス2世によって司法の中心地として計画されていたジュリア通り北部地域は、サンガッロによって建てられた3つの建築によって新たな役割を持ち始めた。ジュリア通りは、サン・ジョヴァンニ・デイ・フィオレンティーニ教会の建設によって、フィレンツェ出身の人々の地域社会の中心地となった一方で、サンガッロによって建てられた自宅兼工房により街路の体裁が整えられることになり、15世紀に経済の中心地として発展したパンキ通りにならぶ、フィオレンティーニ地区の重要な街路になったと考えられる。

5. おわりに

本稿によって明らかになったフィオレンティーニ地区とジュリア通りの特質をまとめると以下の通りである。

- (1) 16世紀のローマに住んでいたフィレンツェ出身の人々は、ピエタ信心会の礼拝堂があったポンテ地区に集中して住んでいたことと、当時のポンテ地区には銀行家、商人、金細工師、マエストロの他にも、飲食店の店主や仕立屋、パン屋、洗濯屋などの職業をもつフィレンツェ出身者が住んでいたことが明らかになった。
- (2) 1508年にはじめられたユリウス2世とブラマンテによるジュリア通り北部地域における敷地割りの整理は、ジュリア通

りに対して斜めに交差していた旧都市軸を、ジュリア通りに対して垂直に整備するものであった。そして、ピエタ信心会の礼拝堂の破壊は、この敷地整備の一環として実施されたと理解できた。

(3) ユリウス2世の都市計画が中止された後、フィレンツェ出身の法王レオ10世によりサン・ジョヴァンニ・ディ・フィオレンティーニ教会の建設が開始された。この新しい教会の設計に従事していたフィレンツェ出身の建築家サンガッロは、フィレンツェ出身の人々の地域社会と、ユリウス2世とブラマンテによって整理された敷地に魅せられ、自邸兼工房を建設し、ジュリア通り北部地域の街路空間を発展させた。

<謝辞>

本稿執筆にあたり、ご指導頂いた陣内秀信先生（法政大学教授）、エンリコ・ジェノヴェージ先生（ローマ・ラ・サピエンツァ大学教授）、矢代眞己先生（日本大学非常勤講師）に心から感謝申し上げます。

注

¹ Luigi Salerno, Luigi Spezzaferro, Manfredo Tafuri: *Via Giulia, una utopia urbanistica del 500*, Casa Editrice Stabilimento Aristide Staderini spa, 1973.

² 各建築の主要参考文献は、以下の通り。番号は図3に対応。(1) Pietro Tomei: *Le case in serie nell' edilizia romana dal '400 al '700*, Estratto dalla rivista "Palladio" III, Ulrico Hoepli Editore, 1938. (2) Apollonj Ghetti, Bruno Maria: *I Monumenti italiani, Rilievi raccolti a cura dell' Accademia d' Italia*, Fascicolo XII, Abbriche civili nel quartiere del rinascimento in Roma, 1937. (3) L.Salerno, L.Spezzaferro, M.Tafuri: op.cit., 1973. (4) Pietro Tomei: op.cit., 1938. (5) Roma dieci 'Saggi' di restauro, Officina Edizio, Roma, 1993. (6) L.Salerno, L.Spezzaferro, M.Tafuri: op.cit., 1973. (7) Sung Yong Cho: *I progetti e la realizzazione del Palazzo Sangallo in Via Giulia a Roma*, Università degli studi Roma "La Sapienza", Quaderni dell' istituto di storia dell' architettura, Bonsignori Editore, 2002, pp.39-52. (8) Francesca Corona: *Palazzo Sacchetti e l' attività di Antonio da Sangallo il Giovane*, Università degli studi Roma "La Sapienza", Quaderni dell' istituto di storia dell' architettura, Bonsignori Editore, 2003, pp.39-56. (9) L.Salerno, L.Spezzaferro, M.Tafuri: op.cit., 1973. (10) L.Salerno, L.Spezzaferro, M.Tafuri: op.cit., 1973.

³ Matizia Maroni Lumbroso, Antonio Martini: *Le confraternite romane nelle loro chiese*, Roma, Fondazione Marco Basso, 1963, p.164.

⁴ L.Salerno, L.Spezzaferro, M.Tafuri: op.cit., 1973, p.33.

⁵ バンキ通りは、現在、バンコ・ディ・サン・スピリト通りと呼ばれている。Silvia Danesi Squarziana: *Maestri fiorentini nei cantieri romani del quattrocento*, Officina Edizioni, 1989, p.14.

⁶ M.M.Lumbroso, A.Martini: op.cit., 1963, pp.164.

⁷ イタリア語表記は、Campagna della Pietà o della Misericordia。ミゼリコルディア会とは、トスカナ州において病人を収容して治療する慈善団体を意味する。

⁸ 現在のゴンファローネ礼拝堂の敷地にあった教会。Ferruccio Lombardi: *Roma, Le chiese scomparse la memoria storia della città*, Fratelli Palombi Editori, 1996, p.174.

⁹ S.D.Squarziana: op.cit., 1989, pp.75-302.

¹⁰ S.D.Squarziana: op.cit., 1989, p.13.

¹¹ S.D.Squarziana: op.cit., 1989, p.13.

¹² Mariano Amellini: *Un censimento della città di Roma sotto il ponteficato di Leone X*. Tratto da un codice inedito dell' Archivio Vaticano, Tipografia di Roma del CAV, Alessandro Befani, 1882.

¹³ Domenico Gnoli: *Descriptio urbis o censimento della popolazione di roma*

avanti il sacco borbonico, R.Società Romana, 1894.

¹⁴ Italo Insolera: *Roma, immagini e realtà dal X al XX secolo*, Roma, Editori Laterza, 1980, p.85.

¹⁵ 本稿ではインソレーラの研究に準じ、フィレンツェ出身者が所有する建築の住民はフィレンツェ出身の家族であるという認識に基づき統計分析をおこなった。表1において、各地区における建物所有者の合計に対するフィレンツェ出身の建物所有者の割合が、住民数の合計に対するフィレンツェ出身者の割合を上回っている理由は、当時のローマに住んでいた有力貴族の大邸宅に100人以上の住民がいる事例が多くあったためである。これらの邸宅に住んで働いていたフィレンツェ出身の人々が存在したと考えられるが、クレメンツ7世による国勢調査記録からそれを理解することは不可能なため、本稿では算出していない。

¹⁶ L.Salerno, L.Spezzaferro, M.Tafuri: op.cit., 1973, pp.66-67.

¹⁷ L.Salerno, L.Spezzaferro, M.Tafuri: op.cit., 1973, pp.72-76.

¹⁸ Il codice A.IV.15 dell' Archivio dell' Arciconfraternita di San Giovanni dei Fiorentini. (L.Salerno, L.Spezzaferro, M.Tafuri: op.cit., 1973, p.70.)

¹⁹ L.Salerno, L.Spezzaferro, M.Tafuri: op.cit., 1973, p.202.

²⁰ Sung Yong Cho: op.cit., 2002, p.49.

²¹ この道には街路の名称 (via, vicolo) はついておらず、テヴェレ川側の空地とともに Largo dei Fiorentini と呼ばれている。

²² 図3作成のベースとした地図は、La mappa aerofotogrammetria(1973)である。また、各建築の平面図については前掲注2)を参考にした。

²³ F.Lombardi: *Roma, Palazzi, Palazzetti, Case, Progetto per intervento 1200-1870*, Edil Stampa, 1991, p.97.

²⁴ P.Tomei: op.cit., 1938, p.4.

²⁵ A.Ghetti, B.Maria: op.cit., 1937, pp.3-2.

²⁶ P.Tomei: op.cit., 1938, p.83.

²⁷ ジュリア通りとチェファード通りの角には、ブラマンテによって建設された石壁が現在でも残っている。

²⁸ L.Salerno, L.Spezzaferro, M.Tafuri: op.cit., 1973, p.92, p.288.

²⁹ L.Salerno, L.Spezzaferro, M.Tafuri: op.cit., 1973, p.270.

³⁰ L.Salerno, L.Spezzaferro, M.Tafuri: op.cit., 1973, pp.68-70.

³¹ 1593年にジャコモ・デッラ・ボルタによって教会は完成され、1620年、カルロ・マデルノによってファサードが加えられた。Roma dieci 'Saggi' di restauro, Officina Edizio, 1993, p.187.

³² L.Salerno, L.Spezzaferro, M.Tafuri: op.cit., 1973, p.265.

³³ 作成年や依頼者に関する詳しい情報は明らかになっていないため、本稿では深く言及しない。L.Salerno, L.Spezzaferro, M.Tafuri: op.cit., 1973, p.267, p.270.

³⁴ Sung Yong Cho: op.cit., 2002, pp.39-40.

³⁵ L.Salerno, L.Spezzaferro, M.Tafuri: op.cit., 1973, p.92.

³⁶ L.Salerno, L.Spezzaferro, M.Tafuri: op.cit., 1973, p.268.

(2004年10月8日原稿受理, 2005年5月13日採用決定)